

栃木県伝統工芸品

『那須の篠工芸』の継承を

生活用品の中には自然に自生するものを材料としたものが多くありますが、その一つに「篠工芸」があります。寒冷地である那須高原では古くから、自生している笹の一種である篠を使った生活用品作りが盛んでした。丈夫でしなやかな篠を使った製品は、軽くて、使いやすく、耐久性に優れているのが特徴です。

栃木県の伝統工芸品にも指定されている「那須の篠工芸」ですが、製作者の高齢化や後継者不足でその存続が危ぶまれています。那須の篠工芸の現状と保存・継承の取り組みを探りました。



全国的にも珍しい篠工芸

町内に豊富に自生する篠竹は、細工の容易な原料として、古くから利用されてきました。那須の篠工芸で使われている篠は、笹の一種でアズマネザサといえます。篠竹にも適否があり、土地のやせた寒さの厳しい土地柄のものが最適とされています。

作られる製品は、農業用品や台所用品など日用品として使われていたものが多く、一升ザル、三升ザル、みそこしザル、梅ザル、メカイ、ハケゴなどのほか、篠笛や花カゴ、一閑張り（紙を貼り、漆を塗ったもの）といった製品も作られています。通気性に優れ、果物入れや園芸用品、各種インテリ

アとしても利用できます。笹の一種である篠を使った工芸品は、全国的に見ても珍しいといわれています。

篠工芸の作業工程

篠工芸の全体的な工程は、篠を刈り取り、乾燥させ、材料となる「ヒネ」を作り、製品を編むという流れになります。

①篠刈り 11月から12月にかけて原料となる篠を刈り取り、先端の葉を切り落とします。刈り取る篠はその年に生えた新しい篠です。



②乾燥・保存 刈り取った篠は、冬の間屋外の軒下などで乾燥させ、春に屋内に取り込み、棚の上などに置いておきます。

③二つ割り・四つ割り 「ノザシ」と呼ばれるナタのような道具を使い、乾燥させた篠を二つに割り、篠についている皮を取り除きます。二つに割った篠をさらに割って四本にします。節のある篠を四等分

するのは、思ったより難しく、熟練の技が必要となります。



④水に浸す 四つ割りの篠を1日から2日間水に浸して柔らかくします。

⑤ヒネ作り 水に浸した篠を少し乾かしてから、ノザシで篠の先端に裂け目を入れ、篠の表皮を内側の部分からはがします。この表皮の部分が篠工芸の材料となり、「ヒネ」と呼ばれています。

